

世界をつなぐ〈神明〉の橋になりたい

～キム・ドクスを支えるエネルギーと使命～

1952年、キム・ドクスは男寺党(ナムサダン)の芸人の息子として生まれ、物心着いた頃から、父の芸人仲間であるヤン・ドイル(男寺党初の人間文化財認定者)のチャンゴ演奏を見よう見まねで覚える。大人の演奏を向かい合わせて真似していたため、ドクスは右のバチと左のバチを反対に持つ癖がついてしまった。本来右利きのドクスが、チャンゴ演奏の時だけ左利きの演奏スタイルとなるのはそのためである。

ドイルに才能を見込まれ、わずか五歳で男寺党デビュー。七歳にして全国能楽コンクールでチャンゴを演奏し、「化け物みたいに動く」と驚愕の視線を集め、みごと大統領賞(最優秀賞)に輝き、神童・天才の名を欲しいままにする。中学はソウルの国楽芸術学校に進むと同時に韓国民族歌舞芸術団の一員となり、一年の大半は世界ツアーに出る生活が始まる。

「世界をつなぐ〈神明〉の橋になる」という使命に燃えるドクスは、充分にその生活を楽しんでいたが、やがて時代の流れと共にドクスの活動にも岐路が訪れる。1977年、朴正熙維新政権下で、ケンガリ、ブク、チャンゴ、チンなどの伝統打楽器が「デモなどで打ち鳴らされる」という理由で、押収対象楽器に指定されてしまったのだ。

岐路に立たされたドクスは、悩みに悩み抜いた末に「伝統にしがみついたら、いっそ異端になってやる」と決意を固める。そして編み出されたのが、「四つの打楽器を使って座ったまま演奏する」というスタイル、つまり四つ(サムル)の楽器による演奏(ノリ)という意味の「サムルノリ」だった。

韓国で初めてその演奏に接した芥川賞作家の故・中上健次はその演奏を聴いて「世界の音楽シーンはぶっ飛んだ!」と驚愕し、すぐに日本公演の準備にとりかかる。



1984年10月、中上の招きでサムルノリは衝撃的な日本デビューを果たす。東京芝の増上寺で行われた公演は日本のアーティスト達に圧倒的な好評で迎えられ、ここから荒木経惟や坂本龍一、篠山紀信、山口昌夫、新井満、千野秀一、近藤等則など日本を代表するアーティスト達との交流が始まる。

世界ツアーでも世界のアーティスト達に衝撃を与え、ビル・ラズウェル、アイブ・ディエン、シャノン・ジャクソン、シャンカール達と組んだ「SXLプロジェクトバンド」を結成したり、インスティック・ファクトリー、坂本龍一、山下洋輔、ハービー・ハンコック、マイルス・デイビスとのセッションも盛んな行われるようになるなど、オーケストラとの競演、ジャズやロックなどとのジョイントなどクロスオーバーな活動によって世界50カ国以上にファンを持つに至る。

現在は韓国芸術総合学校伝統芸術院演戯科教授、社団法人 サムルノリ・ハヌルリム 芸術監督を務めるかたわら、ワークショップや文化交流にも力を入れている。95年国民勲章、2007年銀冠文化勲章受章。

※キム・ドクス著『世界を打ち鳴らせ サムルノリ半生記』(岩波書店/刊)より構成

サムルノリ楽器紹介



チャンゴ

中央がくびれた木製の胴の両面に牛や犬の皮を張った太鼓。高音の面を細長い竹のバチで叩き、低音の面は竹の根のバチで叩く。ブンムルをはじめ宮廷音楽から楽器伴奏、民謡、巫楽などあらゆる韓国音楽に使われる。雨の音を表すともいわれる。



ブク

桐や松などの木をくりぬき牛の皮を張った太鼓。パンソリの伴奏楽器としても知られる。太く力強い音を出し、正確な拍子で基本的なリズムを担う。雲の音を表すともいわれる。



ケンガリ

直系20～23センチほどの金属の鉦(かね)。内側を手でミュートし、平たい方をバチで叩く。高音でかなり複雑なリズムを叩き、全体をリードする。雷の音を表すともいわれる。



チン

直系35～42センチほどの金属の鉦。先に布、綿を巻き付けたバチで叩く。ブンムル、宮廷の行進音楽、巫楽に使われる。低く重厚な音を出し、リズム型に区切りをつける。風の音を表すともいわれる。

【ワークショップのお申込み】

郵便番号・住所・氏名・電話番号・所属団体・「サムルノリ・ワークショップ参加希望」と明記して FAX:018-816-0611
または E-mail: workshop@odoru-akita.orgまでお申し込みください。